

発見 & 全摘・温存の選択

——サードオピニオンまでとった40才モデルの場合——



乳がん  
と  
生きている

日本人女性の20人に1人がかかるといわれる乳がん。乳房を残す、残さないといった重大な決断を迫られるケースもあり、もつと知っておいていいはずなのに、早期発見のための検査法から治療まで、実は知らないことばかり。いざ、そのときになって慌てないために——乳がんの最新情報を3回の連載でお伝えします。

「マイ・ラゲジュアリー・ナイト」(77年)などのヒット曲で知られる歌手のしばたはつみさんが、3月27日、急性心筋梗塞のため57才で亡くなった。しばたさんは、今年1月5日に乳がんであることがわかり、1月29日に左乳房の全摘出手術を受けていた。抗がん剤治療も始め、病気を受け入れて歌手としての復帰も考えていた矢先のことだった。

食生活の欧米化で動物性脂肪の摂取量が増えたことなどの影響もあり、ここ30年で乳がん患者数は約4倍に急増。いまや1年間で4万人、20人に1人がかかる病気となつていく。しかも、発症が多い40代は子育て中の多忙な時期と重なり、発見が遅れることも多い。

「家のお風呂だとボディープラシで体を洗うのですが、たまたま病院のお風呂で、手に石鹸をつけて洗っていたため気づいたようです」

悪意の婦人科での精密検査を経て、静岡県熱海市にある総合病院でマンモグラフィー検査などを受診。1月に夫婦揃って病院に行き、告知を受けた。

「ステージ2なので、全摘出手術になります。手術中に、リンパへの転移が確認された場合はリンパ節も摘出する手術になります」

この言葉に、しばたさんは泣きそうなお顔で次のように答えたという。

「私はベチャバイだから、ひ

乳房全摘手術の前日、夫に「ごめんね」と言え泣



今年はいよいよ乳がんを告知され、乳房全摘手術を受けたのははつみさん。

とつなくとも変わらないうえ、悪いところを取って……」  
正吾さんも応じた。  
「胸を取っても、はつみであることは変わらないよ」と話しました。それでも手術の前日には、泣きじゃくって私に「ごめんね、ごめんね」と謝りました」

セカンドオペニオンはとらなかつた。とることも考えたが、病院の設備や主治医との関係が良かったので、その病院で治療に専念することにしましたという。

手術は成功し、ハワイで療養したことで37kgだった体重も40kgまで増えた。その後1年2か月かけて行方予定の抗がん剤治療の第1回を3月19日に済ませた。

吐き気はひどくなかつたが、低血圧だったしはたさんの血圧は上昇し、微熱が出た。それでも脱毛に備えて、何十万円もする医療用のウィッグや帽子を購入し、前向きに治療に取り組みようとしていた。



4泊5日の入院中、手術前に血圧を計るMAIKOさん。

生検は検査に痛みを伴い、患者に負担がかかるため、前の病院で検査した際のプレパラートを借りてください、といわれた。

MAIKOさんが最初に検査を受けた病院に頼むと、「規則で貸せません」

1人目の医師はそう繰り返すだけだった。  
患者さんのために病院間でのデータや画像の貸し出しは、いまや常識。しかし別の病院に意見を聞くこととするMAIKOさんに、医師は難色を示した。

協力を得られなかった彼女は、再び痛い思いをして検査を受けた。その結果は、前回と同じ悪性だった。

「ステージ1で、しこりは2cm。全摘出をして抗がん剤治療をしたほうが良いといわれました。こんなにづらい検査を受けて同じ結果が出たのなら、受け入れていかなければ

「彼女の家族にがんで亡くなった人はいません。なぜか胸の小さな人は乳がんにはならない」と思い込んでいたようで、検診も受けていなかっただけで、がんだとわかってから「やっぱり定期的に検診を受けておくべきだった」と話していました」（正吾さん）

**95%大丈夫といわれながら結果は悪性**

しばたさんだけではない。乳がんの検診をした経験がなかったモデルのMAIKOさん（40才）も、08年11月、お風呂にはいっていったときに自己チェックをしていた左乳房の乳頭下あたりに、ポツコリとしたしこりらしきものを発見した。

「あれ、何これ？という感じ。手指の関節のような硬さでした。右にはありません。後になつてわかるのですが、その硬さや大きくなるまで、10年以上も経っていたそうです」（MAIKOさん）

その後は、婦人科の医師から紹介状を書いてもらい、東京にある総合病院へ。そこで



MAIKOさんは「乳がんを知らなかった。悪性です」と驚愕する。MAIKOさんは良性といわれ

いけないなと思いました。2人目の先生はとも親身になつてくださったので、手術を受けようと思得しました」（MAIKOさん）

そこへ、元義母から「乳がんなら聖路加病院がいいらしい」という連絡をもらった。元義母も大手術した経験があり、自分のことのようにMAIKOさんを心配して、病院関係者を通じて紹介してくれ

た。MAIKOさんは、これを受け入れた。サイドオペニオンを求め、とことん検査してそれで納得しようと思つたからだ。

検査などで不安ななか、生活のためにモデルの仕事は続けていた。

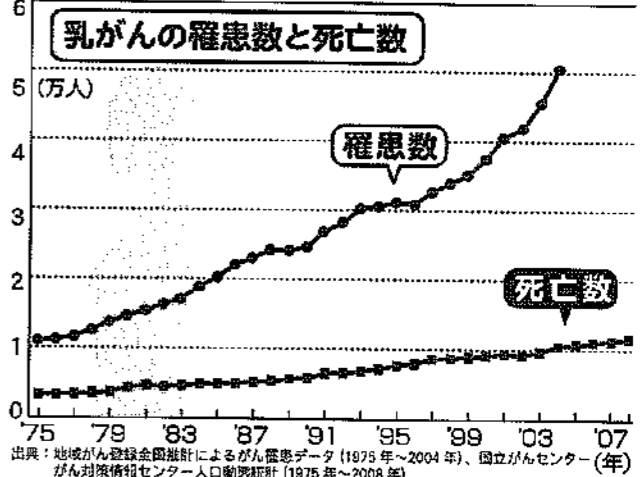
「マンモトーム検査は、局部麻酔で太い針を刺し痛いのので傷口にガーゼを当ててフラジヤをして、カメラの前に立ちました。でも仕事をしてい

る間は乳がんであることを忘れられ、痛みも感じなかつたんです」（MAIKOさん）

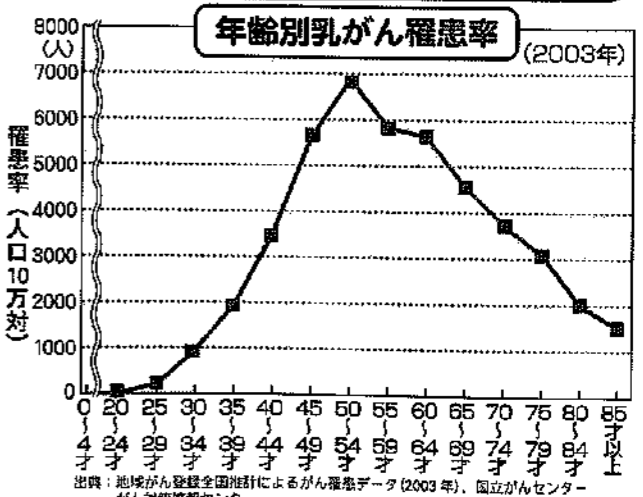
一方で、  
「できれば全摘出したくない。摘出して外見が変わったらモデルの仕事に支障が出るかもしれない……」

当初、3人目の医師も、やはり全摘出の可能性が高いという見解だった。しかしある日、新たな検査

**乳がん罹患数が急増中**



**発症のピークは40～50代**



マンモグラフィ、視触診、エコー(超音波検査)、針を刺して細胞を取って検査する針生検を受けた。

そのとき、医師はいった。「見た感じ、95%良性。大丈夫です」

このひとことで、しこりを発見したときから抱えていた不安がすーっと消えたという。その1週間後、病理検査の結果を聞きに行つたMAIKOさんは愕然とする。

大丈夫だと話した医師が、「おかしいんだよね。針生検のプレパラートが悪性です」

MAIKOさんは良性といわれ

れていたため、誰も伴っていかなかつた。厳しい医師の告知をひとりり聞き、どん底に突き落とされた。

「転移が心配なので全摘出をおすすめします。とことんやつつけるためには、抗がん剤しかりありません」と淡々といわれました。頭が真っ白になり、お会計を済ませて病院の外に出たら涙があふれてきて、ベンチに座つて号泣しました」（MAIKOさん）

彼女はシングルマザーで15才になる息子がいるが、元夫との関係も良好なため、まず元夫に、続いて事務所のマネジャーに電話で連絡した。息子には家に帰つてから報告した。

「実はママね……」

そう話した瞬間、息子は、「パパから聞いて知ってる」帰宅までの間に、元夫と息子は「ママをサポートして欲しいのだ」と男同士で約束していたのだという。とはいえず、「なぜ私が、がんに……」と、乳房を失うこと、死への不安などが頭をよぎった。

**サイドオペニオンまで求めて、乳房温存手術に**

1週間後、事務所のすすめでセカンドオペニオンを求めることになった。

前回とは別の病院で診察を受け、これまでと同じ検査に加えMRI(核磁気と電波を使った検査)やCT(X線を使った検査)などの検査を受けた。この病院の医師に、針

の結果を見てその医師がいった。「今回は温存でいいかもしれない。今回は温存でいいかもしれない。耳を疑った。嬉しさがこみ上げたが、一方で不安もよぎつた。

「転移が心配なんですけど、全摘出でなくて大丈夫ですか」とすると医師は、「ほくがいていっていいから、大丈夫」といつてくれた。

しこりの見つかった場所、手術箇所などを説明してくれたMAIKOさん。



しかもしこりができるのは、腋の下あたりだと思ひ込み、そこばかりをチェックしていました。乳製品や肉も食べていましたし、食生活にも特別気を付けていませんでした」（MAIKOさん）

いまでもがんと闘う実母には乳がんであることを黙っていたが、抗がん剤治療が始まる前に話した。

「母はショックだったと思うのですが、ああ、そう、とひとこと。多くをいわなかつたのは母の優しさだと思うのですが、同時に、きちんと治療しなさい」といわれました」（MAIKOさん）

手術後、1年余りが経った。ホルモン療法は続けているが、元夫、息子のサポートで、以前より健康になった気分だと話す。一時は脱毛したので、スキンヘッドにして帽子をかぶつたが、いまは髪の毛も元に戻った。がんであることを

「がんを意気はしていたのですが、なぜか自分だけがならないという変な自信があつた。



「モデル、40歳。乳がん1年生」MAIKO 著 (KKベストセラーズ・1365円)。

ブログでカミングアウトして「がん友」もたくさんでき、治療に関する情報交換や再発の不安も含めて話し合っている。「いちばんつらかつたのは、抗がん剤の副作用です。吐き気は軽かつたのですが、味覚障害が起こり、味がわからなくなりました。料理をつくるときは息子の味をみてもらいました。また、便秘にも悩まされました。こんな思いをしないためにもせひ、みなさんには検診を受けてほしいと思つています」（MAIKOさん）

MAIKOさんは今後、乳がんの検診率を上げるための啓発活動が続けていくという。次回は乳がんの最新治療について触れていく。